

## 両親からの褒められ経験と自尊感情及び不登校傾向の関連

北田 千尋・中地 展生

### 問題

文部科学省(2017)の調査によると、不登校児童生徒は4年連続で増加しているという。特に、中学校の不登校生徒数は約10万3千人となっており、不登校生徒に関する研究や適切な支援が求められている。

中学生の不登校状態への援助については、これまで多くの研究がなされてきた。例えば粕谷・河村(2004)は、不登校生徒と出席良好生徒の比較において、不登校生徒の自尊感情の低さを指摘している。また五十嵐・萩原(2004)は、昨今の多様化する不登校状態を踏まえ、予防的援助のためには幼少期からのどのような関わりが重要なのか検討するために「中学生の不登校傾向と幼少期の父親及び母親への愛着との関連」について検討している。

しかし、このように養育態度に着目して不登校を考える際、その家族は要因ともなり得るといふ捉え方の一方で、影響を受ける側となることも想定される(平瀬・西村, 2015)。実際、東(2010)によると、不登校の子どもを持つ親は、子どもと同様に苦しみ、焦りや不安を抱えているという。また中地(2015)は、このような研究を発表する上で、親が原因で子どもが不登校になったと主張していると誤解されないようにすることに注意していると述べている。以上のことから、今後、不登校生徒について考える際、原因を親に探すよりも、子どもに対してどう接すればいいのかという予防法や、より具体的な実践方法が必要となってくると考える。

予防法について、井上(2015)は自尊感情が高い人の方がそうでない人よりも幼少期に両親からよく褒められていたと感じていること、叱ることが自尊感情の形成に影響を及ぼすわけではないことを明らかにしている。この研究では自尊感情と不登校傾向の直接の関連については検討されていないものの、不登校傾向に影響を及ぼすと言われている子どもの自尊感情を形成する材料として、「褒める」ことが重要な役割を果たすことは明らかになったといえる。さらに、井上(2015)は誰(父母)が子どものどこを褒めるのが望ましいのかということを検討しており、その結果、褒められた内容によって自尊感情の高まりに与える影響が変化することも明らかになっている。それにも関わらず、「褒め」の研究において、いまだ褒められた子どもの認識や感情を扱った研究は少なく(青木, 2005)、子どもが本当は何を褒めてほしいと思っているかについては明らかにされていない。

以上を踏まえ、本研究では、両親からの褒められ経験と自尊感情及び不登校傾向の関連について明らかにする。また、子どもが実際に両親から何を褒められていたのか、そ

れが本当に子どもにとって褒めてほしい内容だったのかについても検討することとする。そのため、①褒められ経験が多い人の自尊感情は高くなり、不登校傾向は低くなる、②褒められた内容と褒めてほしい内容のズレが小さい人の自尊感情は高くなり、不登校傾向は低くなる、という2つの仮説を設けた。

なお、「褒め」を扱うに当たって、心理学の分野では、正式な定義が提唱されていない。そこで、本研究ではAnderson, Manoogian & Reznick (1976), Swann & Pittman (1977), 松尾(2007)を参考に、『考える力があるね』などの能力・資質や、『よく練習したね』などの努力、『これからもっとよくなるね』などの成長可能性を評価した声掛けで、ご褒美を与えるなどの、物理的な報酬が伴わないもの」と褒めの定義として扱うこととした。

### 方法

#### 調査対象者

近畿圏内の4年生大学に在籍する大学生166名(男性78名、女性88名)を対象とした。平均年齢20.54( $SD=8.83$ )歳であった。

#### 調査時期

2016年10月～11月であった。

#### 質問紙

質問紙は、以下より構成された。

- 1) 調査対象者情報 性別、年齢、学年の記入を求めた。
- 2) 両親からの褒められ経験に関する項目 母親・父親それぞれから褒められた内容について、趙・松本・木村(2011)が作成したものに一部修正を加えた7項目(学業、部活動・習い事、家の用事、性格・生活態度、礼儀・思いやり、容姿、親の言うことを聞いた)を使用し、1(まったく褒められていなかった)から5(とても褒められていた)の5件法で回答を求めた。
- 3) 両親から褒めてほしかった内容の程度に関する項目 母親・父親それぞれに褒めてほしかった内容について、2)と同様の質問項目を使用し、1(まったく褒められなかった)から5(とても褒められた)の5件法で回答を求めた。
- 4) 両親から最も褒めてほしかった内容 両親から最も褒めてほしかった内容について、2)と同様の質問項目を使用し、母親、父親別にそれぞれ1つずつ回答を求めた。
- 5) 自尊感情尺度 Rosenberg(1965) が作成し、山本・松井・山成(1982)が邦訳した自尊感情を測定する尺度であ

る。「少なくとも人並みには、価値のある人間である」等の10項目から構成され、1(あてはまる)から5(あてはまらない)の5件法で回答を求めた。

6) 不登校傾向尺度 五十嵐・荻原(2002)が作成した尺度で、中学生の不登校傾向を測定するものである。「別室登校を希望する不登校傾向(3項目)」「精神・身体症状を伴う不登校傾向(4項目)」「遊び・非行に関連する不登校傾向(4項目)」「在宅を希望する不登校傾向(2項目)」の計13項目について、項目を一部変更し、1(あてはまる)から4(あてはまらない)の4件法で回答を求めた。

なお、本研究では、中学時代の褒められ経験、自尊感情及び不登校傾向を検討するため、大学生に中学時代のことを回想して全ての質問に答えてもらうこととした。

### 手続き

大学での講義時間内に質問紙を配布、回収した。

### 倫理的な配慮

調査前に、調査内容及び個人情報やプライバシーの保護について説明した。また、質問紙への回答は無記名で求め、回答は対象者の自由意思であり、途中で中止できることも伝えた。

## 結果

### 各尺度についての因子分析

最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。ただし、問4「学校に行ってしまうと楽しいが、それまでは行きたくないと思っていた」と問9「夜遅くまで外で遊んでいて、学校に行くのがつらいと思うことがあった」の2項目は、因子負荷量が.35に満たなかったため削除し、次に最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。因子数はスクリープロットを参照し、4因子とした。なお、分析にあたっては、不登校傾向因子は得点が高いと不登校傾向が高いと捉えるため、項目10は逆転項目とした。

第1因子は「学校では、授業より、保健室や相談室で過ごしたかった」「学校に行っても、保健室や別室で過ごしたかった」「教室に行かなくても保健室や相談室で勉強できればいいと思っていた」の計3項目に対して因子負荷量が高く、先行研究と同様の結果が得られたため「別室登校を希望する不登校傾向」の因子とした。

第2因子は「少しのことで気分が落ち込み、学校に行くのがつらかった」「学校に行くと、誰かに悪口を言われているような気がしてならなかった」の計2項目に対して因子負荷量が高く、「気分の低下を伴う不登校傾向」の因子とした。

第3因子は「学校へ行ったり家にいたりするより、それ以外の場所で友達とずっと遊んでいたかった」「学校に行かず、家で友達と遊んでいたかった」「学校や自分の家で仲のいい友達と過ごすより、友達の家で過ごす方が楽しかった」の計3項目に対して因子負荷量が高く、「友達との遊びに関連する不登校傾向」の因子とした。

第4因子は「先生や友達と会いたかったので、家にいるより学校に行きたかった(逆転項目)」「学校に行かず、家で友達と遊んでいたかった」「学校に行くことを考えたら、頭が痛くなったり、気持ちが悪くなったりした」の計3項目に対して因子が高く、「不特定な理由による不登校傾向」の因子負荷量とした。

信頼性を検討するために、Cronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、「別室登校を希望する不登校傾向」が.90、「気分の低下を伴う不登校傾向」が.80、「友達との遊びに関連する不登校傾向」が.70、「不特定な理由による不登校傾向」が.74であり、因子構造の明確さと信頼性は確認されたといえる。以上の結果をTable 1に示す。

次に、自尊感情について最尤法、プロマックス回転で因子分析を行った。その結果、因子数は1つとなり、先行研究の結果と一致した。また、Cronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、 $\alpha = .88$ となり、因子構造の明確さと信頼性は確認さ

Table 1 不登校傾向尺度の因子分析(最尤法・プロマックス回転)の結果

No.	項目内容	F1.	F2.	F3.	F4.
3.	学校では、授業より、保健室や相談室で過ごしたかった	1.049	-0.041	-0.052	-0.112
6.	学校に行っても、保健室や別室で過ごしたかった	0.807	-0.014	0.02	0.102
12.	教室に行かなくても保健室や相談室で勉強できればいいと思っていた	0.641	0.176	0.043	0.057
13.	少しのことで気分が落ち込み、学校に行くのがつらかった	-0.042	0.996	-0.023	0.058
7.	学校に行くと、誰かに悪口を言われているような気がしてならなかった	0.151	0.553	0.083	-0.014
8.	学校へ行ったり家にいたりするより、それ以外の場所で友達とずっと遊んでいたかった	0.062	0.036	0.847	-0.099
11.	学校に行かず、家で友達と遊んでいたかった	0.002	-0.199	0.628	0.275
2.	学校や自分の家で仲のいい友達と過ごすより、友達の家で過ごす方が楽しかった	-0.078	0.166	0.574	-0.201
10.	先生や友達と会いたかったので、家にいるより学校に行きたかった(逆転項目)	0.019	0.008	-0.253	0.734
5.	学校に行かず、家で友達と遊んでいたかった	-0.064	0.028	0.203	0.724
1.	学校に行くことを考えたら、頭が痛くなったり、気持ちが悪くなったりした	0.103	0.338	-0.004	0.440
	因子間行列	F1	F2	F3	F4
	F1	—	0.63	0.37	0.55
	F2		—	0.22	0.58
	F3			—	0.25
	F4				—

れたといえる。

### 褒められ経験と自尊感情及び不登傾向の関連

褒められ経験と自尊感情及び不登校傾向との関連を検討するため、「褒められ経験」と「自尊感情」、「褒められ経験」と「不登校傾向」についてそれぞれ  $t$  検定を行った。その際、褒められ経験の得点が高かった上位20%( $N=37$ )を褒められ経験の多い群、得点の低かった下位20%( $N=30$ )を褒められ経験の少ない群とした。その結果、褒められ経験の多い群の方が少ない群に比べて、自尊感情が有意に高くなり( $t(49)=3.65, p<.001$ )、不登校傾向は有意に低くなった( $t(65)=2.18, p<.05$ )。以上の結果をTable 2に示す。

Table 2 両親からの褒められ経験の平均値とSD及び  $t$  検定の結果

	褒められ経験の多い群		褒められ経験の少ない群		$t$ 値
	$M$	$SD$	$M$	$SD$	
自尊感情	32.08	7.08	24.00	10.31	3.65***
不登校傾向	22.38	7.44	26.80	9.17	2.18*

\* $p<.05$ , \*\*\* $p<.001$

### 褒められた内容と褒めてほしかった内容のズレと自尊感情及び不登校傾向の関連

褒められた内容と褒めてほしい内容のズレについて検討した。褒められ経験のズレの算出方法は次の通りである。褒められた内容の点数から褒めてほしかった内容の点数を引き、その差の絶対値をズレの値とした。

分析では、ズレの値の小さい上位20%(母: $N=23$ , 父: $N=29$ )を褒めてほしかった内容と実際に褒められた内容のズレが小さい群(以下:ズレ小群)、絶対値の大きい下位20%(母: $N=37$ , 父: $N=37$ )を褒めてほしかった内容と実際に褒められた内容のズレが大きい群(以下:ズレ大群)として独立変数として使用し、父母別に、従属変数を「自尊感情」「不登校傾向」とし、 $t$  検定を行った。

その結果、母親では、自尊感情にズレ小とズレ大群で有意差はなく( $t(58)=1.09, n.s.$ )、不登校傾向においてもズレ小群とズレ大群に有意差は見られなかった( $t(58)=.78, n.s.$ )。

しかし、父親ではズレ小群の自尊感情が有意に高くなり( $t(64)=2.08, p<.05$ )、不登校傾向も有意に低くなった( $t(64)=3.39, p<.001$ )。以上の結果をTable 3, 4に示す。

### 褒められ経験が不登校傾向の各因子に及ぼす影響

両親からの褒められ経験が不登校傾向の各因子にどのような影響を及ぼすのか検討するため、「母親からの褒められ経験」及び「父親からの褒められ経験」を従属変数、不登校傾向の4因子を独立変数として、重回帰分析を行った。

その結果、母親からの褒められ経験が不登校傾向の各因子に与える影響では有意差は見られなかった。しかし、父親からの褒められ経験が「気分の低下を伴う不登校傾向」に負の影響を与えていることが明らかになった( $\beta = -.252, R^2 = .070, p<.05$ )。母親・父親からの褒められ経験が不登校傾向の各因子に及ぼす影響の重回帰分析の結

Table 3 母親からの褒められ経験のズレの平均値とSD及び  $t$  検定の結果

	ズレ小群		ズレ大群		$t$ 値
	$M$	$SD$	$M$	$SD$	
自尊感情	29.22	8.56	26.81	8.22	$n.s.$
不登校傾向	23.52	8.51	25.13	7.24	$n.s.$

Table 4 父親からの褒められ経験のズレの平均値とSD及び  $t$  検定の結果

	ズレ小群		ズレ大群		$t$ 値
	$M$	$SD$	$M$	$SD$	
自尊感情	30.55	8.07	26.35	8.26	2.08***
不登校傾向	21.10	7.97	27.73	7.80	3.40*

\* $p<.05$ , \*\*\* $p<.001$

果をFigure 1, 2に示す。

### 褒めてほしかった内容

男性では、母親に褒めてほしかった内容は学業が18名(23.1%)と一番多く、次いで部活動・習い事12名(15.4%)、性格・生活態度10名(12.8%)が多かった。女性でも、母親に褒めてほしかった内容は学業が26名(29.5%)と一番多く、次いで部活動・習い事12名(13.6%)、性格・生活態度11名(12.5%)が多かった。

父親に褒めてほしかった内容について、男性では学業が18名(23.1%)と一番多く、次いで部活動・習い事が13名(16.7%)、性格・生活態度9名(11.5%)が多かった。女性では、父親に褒めてほしかった内容は学業が25名(28.4%)と一番多く、次いで部活動・習い事16名(18.2%)であったが、次に多かった内容は家の用事10名(11.4%)であった。母親・父親から褒めてほしかった内容の内訳をFigure 3, 4に示す。

## 考察

### 褒められ経験と自尊感情及び不登校傾向の関連

褒められ経験と自尊感情及び不登校傾向の関連を検討した結果、親からの褒められ経験の多さは子どもの自尊感情を上げており、仮説①は支持された。この結果は、保護者から褒められる頻度と子どもの自尊感情に正の相関が見られるとするFelson & Zielinski(1989)の研究結果や、保護者が褒めることにより子どもの自尊感情は高まるという兄井・洲崎・横山(2013)の研究結果と一致した。また、不登校傾向についても褒められ経験が多い人ほど低いという結果となり、褒めることが不登校傾向に直接的な効果をもたらすことが示唆されたといえる。

兄井他(2013)は、自尊感情の高い子どもほど、保護者が望ましいとする行動をしているために褒められる頻度が多くなっているのではなく、保護者から褒められることに起因して、子どもの自尊感情が高まることや、褒められることによって高まった自尊感情が、子どもの就寝時間やお手伝いの頻度、授業中の挙手や発言行動に正の影響を与えていることを明らかにしている。



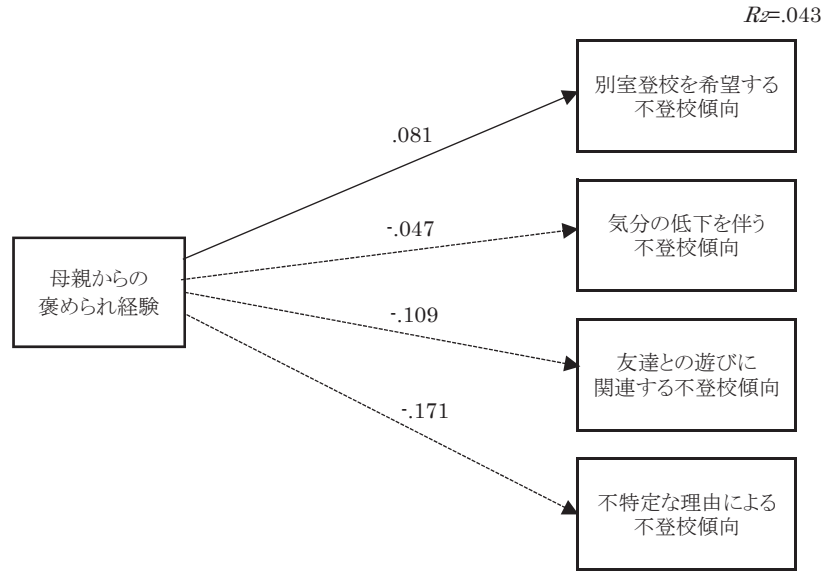


Figure 1 母親からの褒められ経験が不登校傾向の各因子に及ぼす影響の重回帰分析の結果

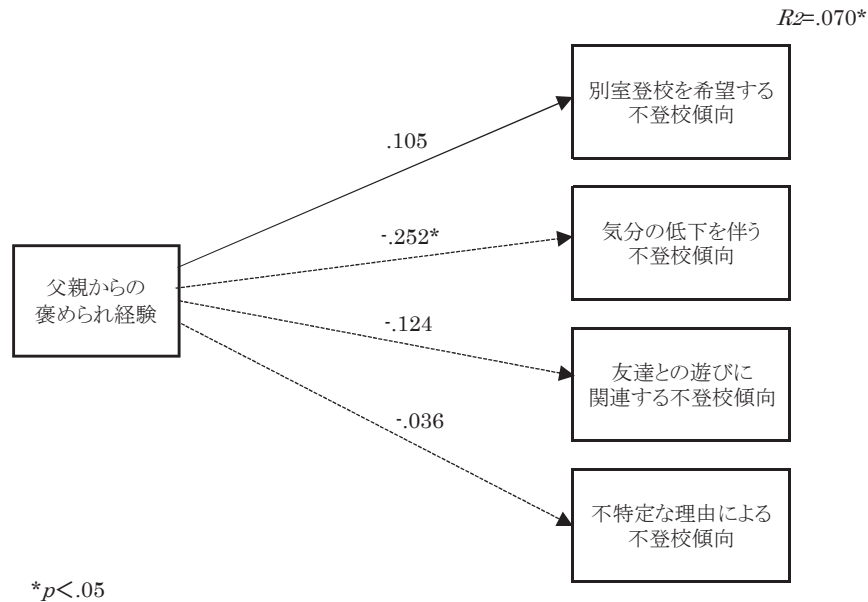


Figure 2 父親からの褒められ経験が不登校傾向の各因子に及ぼす影響の重回帰分析の結果

しかし、子どもを褒めたことで、自尊感情や生活のあり方に必ずしも効果的な影響を与えるとは限らない。実際、褒めることが常に望ましい行動を促進するとは限らないという見解もある(Kamins & Dweck,1999)。兄井他(2013)は、両親からの全面的な受容、愛情及び是認が無い中でいくら子どもを褒めても自尊感情を高めることはできないとしている。それでいえば、本研究の結果は褒められた経験が自尊感情及び不登校傾向に効果的に働いており、両親からの全面的な受容や愛情を受けていたと認識している人が多かったのではないだろうか。

もちろん、不登校とは「学校に登校しない状態のこと」であり、一概に望ましい行動と称してしまうのは抵抗がある。しかし、安心して帰れる場所があるということが登校という行動

を後押しするのではないだろうか。その点で、両親からの褒められ経験は子どもにとって非常に重要なことだといえる。

**褒められた内容と褒めてほしかった内容のズレと自尊感情及び不登校傾向の関連**

自身が父母に褒められたいと思っていることを褒められた方がより効果があるのではないかとすることを明らかにするために、褒められた内容－褒めてほしかった内容を褒められ経験のズレとし、自尊感情及び不登校傾向との関連を検討した。その結果、母親では有意な差は見られなかったが、父親では、ズレが小さい人の方が、そうでない人より自尊感情は有意に高くなり、不登校傾向は有意に低くなった。以上のことから、仮説②は一部支持された。

五十嵐・荻原(2004)は、父親は母親とは違った役割を

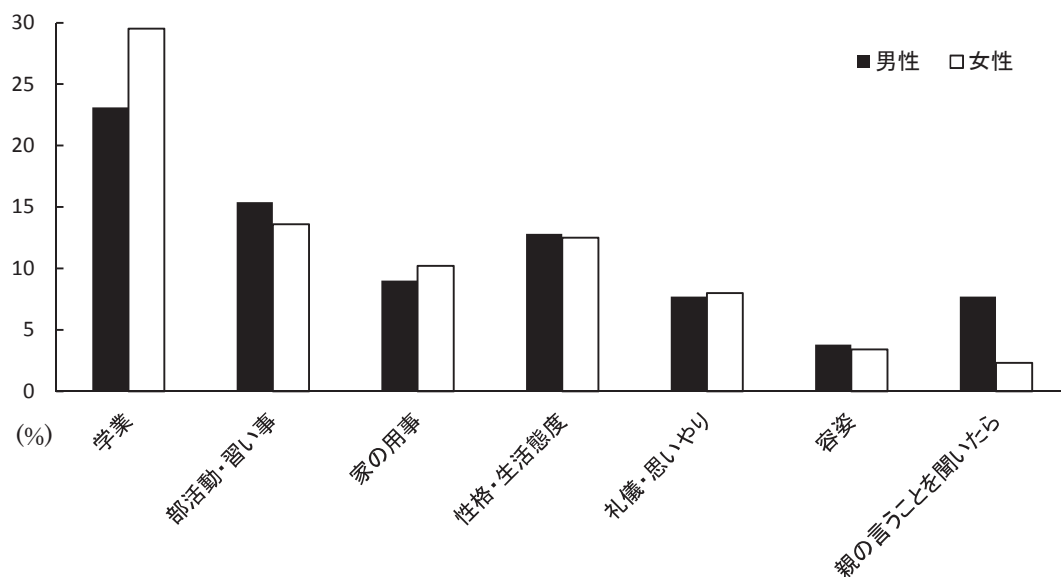


Figure 3 母親から褒めてほしかった内容

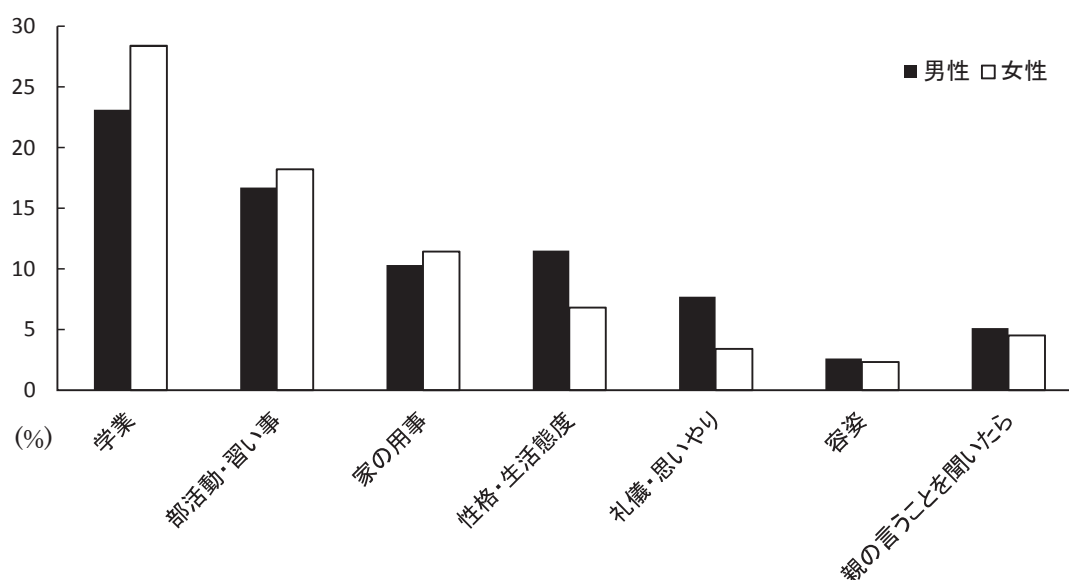


Figure 4 父親から褒めてほしかった内容

果たす可能性が高いことを明らかにしている。また、岡田(2013)は、親の会話を役に立つ、楽しいと感じている子どもは、母親とは「学校生活・友だち」等、子どもの身近な生活に関する内容をよく話しており、父親とは「将来・成績・世の中の事件」等、社会に関わる内容や知的好奇心を高める内容をよく話していることを明らかにしている。さらに、岡本(2004)によれば、母親の役割は子どもの情緒的な安定を維持することであり、父親の役割は、子どもが自信をもって社会生活を営めるよう指導することだという。

ところで、土田・田中・鈴木(2009)が、主な子どもの世話を担っているのは母親だと指摘しているように、母親と父親では子どもと接する時間が少ないのは一般的に父親ではないだろうか。本研究では大学生に対して中学時代を回想

するよう求めたが、金子(1989)が指摘するように、幼少期から子どもは母親と最も密接な結びつきがあり、青年期になって親友を得ても、大部分の者は母親との結びつきが大きく崩れることがない。つまり、一緒に過ごす時間が長い母親に褒められたことは日常の比較的ありふれた出来事として今もなお積み重なっており、内容よりも褒められたかどうかという経験が記憶されていた一方で、普段接する時間の短い父親からの褒められ経験の1つ1つは子どもにとって印象的な出来事として記憶されていたのではないだろうか。

以上のことから、「褒め」においても母親と父親で違った役割を持っており、父親から褒めてほしいことを褒めてもらえていたという事実は、子どもにとっては非常に重要な体験として残されていると考えられる。

### 褒められ経験が不登校傾向の各因子に及ぼす影響

褒められ経験が不登校傾向の各因子にどのような影響を与えるのか検討した結果、父親からの褒められ経験が「気分の低下を伴う不登校傾向」因子に負の影響を与えていることが明らかになった。この因子は「少しのことで気分が落ち込み、学校に行くのがつらかった」「学校に行くと、誰かに悪口を言われているような気がしてならなかった」の2項目で構成されており、この項目からは気分の低下に加え、登校に対する不安が見受けられる。

Mahler & La Perriere(1965)は精神分析の立場から、子どもの分離不安が思春期に持ち越されると、その後の精神病理の要因となりうることを指摘している。登校に対する不安が親との分離不安と同じ意味を含むかどうかは今回使用した質問項目のみからは見出しにくい、先に述べたように、父親の役割は子どもが自信をもって社会生活を営めるよう指導することだといわれている。父親から褒められることによって子どもは自信を持ち、学校という外部集団に対する不安が低減されるのではないだろうか。父親からの褒めは子どもにとってみればいわば外の世界に押し出してくれる存在だと考えることができよう。

### 褒めてほしかった内容

両親から褒めてほしかった内容については、井上(2015)の大学生が児童期に両親に褒められた内容の①学業(成績、勉強、テストなど)②習い事・スポーツ(習い事、美術、音楽、スポーツなど)③課題達成(物事がうまくできた、よい結果がでた、何かをやり遂げたなど)とほぼ一致の結果が得られた。本研究は質問項目をより具体化するため内容を一部変更したため、比較はし難いが、やはり多くの人が学業を褒められることを希望していた。中学生にとって、勉強や部活動などの課題達成は重要な要因で、最早「褒められたい」よりは「やらなければいけない」ことなのではないだろうか。こうして見ると、褒めてほしい内容と褒められたい内容は一致しているようにも見受けられる。

また、男女ごとに見てみると、男性では「親の言うことを聞いたら」において、女性では「性格・生活態度」において、父親より母親から褒めてほしいと思っていたようである。このことから、褒めが効果的に働く内容は母親と父親、また男性女性によっても異なると考えることができるのではないかと。井上(2015)は、母親から「性格・態度」などその子ども自身の特性すなわち自分自身を褒められ認められることを基盤として、父親から能力や努力の成果を褒められることによって、子どもの自尊感情は高くなると指摘している。こうして見ると、女性の方が母親に対して、より自身の成果より、自分自身というものを受け入れてほしいと思っているのではないかと。また男性では、異性親である母親に頼まれたことを実行するという成果や頼もしさを褒められることで自信をつけたいという思いがあるのではないかと推察される。

兄井他(2013)は大人が、できる限り子どもに関心を示し、

見守る中での褒めが重要だとしている。一見「勉強」「部活動・習い事」に目を向けがちだが、子どもが実は関心を持っていることに目を向け、重点的に褒めることで効果的に褒めが働くと考える。

### 今後の課題と展望

本研究では両親からの褒められ経験が子どもの自尊感情及び不登校傾向に効果的な影響を及ぼすことが明らかになった。また、同じ「褒め」でも母親と父親では子どもにもたらす効果が異なったことから、これまでも多くの分野で明らかにされてきた父母の役割の違いが「褒め」においても重要であることが明らかになったといえよう。

しかし、本研究の質問の仕方から実際の褒められ経験を測ることができたのかは定かではないため、質問紙の改善が求められる。さらに、そもそも母親と父親では褒められ経験の多さに差が見られたこと、子どもにも性別があることから「母—娘」「母—息子」「父—娘」「父—息子」の4群の比較が必要だと考えられる。

今後の展望として、誰(男女)が誰(父母)に何を褒められることが不登校傾向にどのように効果的であるのか、父母の褒め役割に基づいて検討することが必要だと考えられる。

### 引用文献

- Anderson, R., Manoogian, S. T. & Reznick, J. S. (1976). The undermining and enhancing of intrinsic motivation in preschool children. *Journal of Personality and Social Psychology*, 34, 915-922.
- 青木 直子 (2005). ほめることに関する心理学的研究の概観 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, 52, 123-133.
- 兄井 彰・洲崎 康臣・横山 正幸 (2013). 子どもの自尊感情と生活のあり方との関係についての研究 生活体験学習研究: 日本生活体験学習学会誌, 13, 43-50.
- 東 宏行 (2010). 教育心理学と実践活動 研究者と教育機関の連携—不登校支援の実践現場との連携から— 教育心理学年報, 49, 180-189.
- Felson, R. B., & Zielinski, M. A. (1989). Children's self-esteem and parental support. *Journal of Marriage and the Family*, 51, 727-735.
- 平瀬 由貴・西村 昭徳 (2015). 母親は子どもの不登校をどのように受け止めていったか 東京成徳大学臨床心理学究, 15, 129-138.
- 五十嵐 哲也・荻原 久子 (2002). 中学生における不登校傾向に関する研究(1): 不登校傾向尺度の開発 日本教育心理学会総会発表論文集, 44, 275.
- 五十嵐 哲也・荻原 久子 (2004). 中学生の不登校傾向と幼少期の父親および母親への愛着との関連 日本教育心理学研究, 52, 264-276.
- 井上 清子 (2015). 両親・教師からの褒められ叱られ経験と自尊感情の関連について 生活科学研究, 37, 97-105.
- Kamins, M. L., & Dweck, C.S. (1999). Person versus process praise and criticism: Implications for contingent self-worth and coping. *Developmental Psychology*, 35, 835-847.

- 金子 俊子(1989). 青年期女子の親子・友人関係における心理的距離の研究 青年心理学研究, 3, 10-19.
- 粕谷 貴志・河村 茂雄 (2004). 中学生の学校不適応とソーシャル・スキルおよび自尊感情との関連—不登校群と一般群との比較 カウンセリング研究, 37, 107-114.
- Mahler, M.s., & La Parriere, K. (1965). Mother child interaction during separation-individuation. *Psychoanalytic Quarterly*, 34, 483-498.
- 松尾 直博(2007). 自尊心を育てるほめ方・叱り方(特集 失敗例から学ぶ ほめ方・叱り方) 児童心理, 金子書房, 61, 308-313.
- 文部科学省 (2017). 平成28年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」結果(速報値)について [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/29/10/\\_icsFiles/afiefieldfile/2017/10/26/1397646\\_002.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/10/_icsFiles/afiefieldfile/2017/10/26/1397646_002.pdf) (2017.11.1取得).
- 中地 展生 (2015). 不登校児の親グループの発展段階に応じたファシリテーション 人間関係研究, 14, 79-85.
- 岡田 みゆき (2013). 中学生における食事中の親子の会話の実態: 親子の会話における小学生から中学生への変化 日本家政学会誌, 54, 3-15
- 岡本 祐子 (2004). 家族関係 子安増生 二宮克美(編) キーワードコレクション発達心理学 [改訂版] 新曜社, 74-77.
- Rosenberg M. (1965). *Society and adolescent selfimage*. New Jersey: Princeton University Press.
- 土田 恭史・田中 勝博・鈴木 澄香(2009). 不等号を用いた親への心理的距離測定の試み 心理学研究, 5, 43-52.
- 趙 善英・松本 芳之・木村 裕 (2011). 回想された親の養育行動が大学生の自尊感情に及ぼす影響の日韓比較: 行動分析的な解釈 社会心理学研究, 27, 1-12.
- Swann, W. B. Jr. & Pittman, T. S. (1977). Initiating play activity of children: The moderating influence of verbal cues on intrinsic motivation. *Child Development*, 48, 1128-1132.
- 山本 真理子・松井 豊・山成 由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面 教育心理学研究, 30, 64-68.

## **Relationship between children being praised by parents and their self-esteem and tendency toward non-attendance at school**

Chihiro KITADA and Nobuo NAKAJI

### **Abstract**

This study focused on the relationship between the children's experiences being praised by parents and their self-esteem and tendency toward non-attendance at school. A survey was conducted with 166 university students who recalled their junior high school time. The students who were praised more by parents had higher self-esteem and lower tendency toward non-attendance at school. Being praised by their mother influenced students' self-esteem and tendency toward non-attendance at school, but for their father, these factors were unaffected unless they were praised appropriately for what they would like to be praised. Being praised by their father reduced the "tendency toward non-attendance at school accompanied by a depressed mood". These results confirmed the differences in parents' praise: being praised by the mother maintained the emotional stability of the children, and being praised by the father promoted their participation in society.

Key-words: being praised, non-attendance at school, self-esteem